

釜石の奇跡 請戸の日常

Miracle of KAMAISHI and ordinal life of UKEDO

水田 恵三¹
Keizo MIZUTA¹

¹ 尚絅学院大学 総合人間科学部
Comprehensive Human Sciences, Shokei Gakuin University

At Tokuto Elementary School located in the coastal area of Namie Town, Fukushima Prefecture after the 2011 Great East Japan Earthquake, we recognized that Tsunami came from the time when it was shaking after the earthquake, and acted immediately, and the headmaster judged the evacuation destination to Ohirayama first. The entire sixth grade, including the children on the wheelchair, was evacuated as usual. Some of the children's parents came to pick up the children, but the teacher refused it and continued to take refuge. I did not know the entrance to Taipingshan, which is the emergency evacuation destination, but I instructed the entrance that the children could play. Get off from Odairayama on Route 6 in the opposite direction. Just as the truck of the carrier passed, all the students moved to the gymnasium with the town hall. Thus, it can be highly appreciated that children's daily activities are linked to evacuation behavior.

Keywords : Great East Japan Earthquake, daily activities, evacuative behavior

1. 目的

2011年に生じた東日本大震災は東日本湾岸部に多大な被害を及ぼした。福島県はその後原発事故災害の被害を受けることにもなる。今回取り上げた請戸小学校は浪江町にあり、海岸から340メートルの所にある小学校である。

浪江町の被害状況は、震災による直接死182名である。請戸小学校では校内にいた児童81名と教職員13人は避難して無事であった。このことはNPO団塊のノーブレスオブリージュによる「請戸小学校物語」や当時小学生であった人の語りによる紙芝居、そして、当時請戸小学校の教員であった先生などが繰り返し伝えてきた。その避難の内容は「釜石の奇跡」と讃えられる釜石の小学生たちと比較しても遜色のないものである。ここでは、請戸小学校の生徒たちが、日常生活の中で行っていたと同じ行動をとって、津波から避難した点を中心に記述する。

2. 方法

発表されたデータや当時小学生であった人へのインタビュー調査を通して、避難行動を分析する。

3. 結果

この浪江町請戸地区への過去の地震の記録は少ない。岩本（2013によれば、869年の貞観の津波において、現福島県浜どおりにも大きな被害があったようである。また、1611年の慶長の津波においては、中村藩（相馬市から現浪江町も含んだ地域）では700名の溺死者があったという記述がある。また、海辺にある苕野（くさの）神社が何度か海没したという記録があり、この地域にも何度か津波は来襲したことは間違いない。それにもかかわらず、この地域には津波は「三陸地方」のものという意識が強く、津波を警告した碑などはなかった。

図1にあるように海から500メートル足らずにある請戸小学校は、明治6年創立その後東日本大震災まで震災、津波の被害はない。請戸小学校は漁港に近く、昔は今以上に栄えた港町である。また、海と山に囲まれた自然豊かな町で、町の人は互いに挨拶を交わし、仲良く暮らして

いる。



図1 請戸小学校避難経路

2011年3月11日に地震が生じたときに福島県沖のマグニチュードは6.1 震度は5弱であった。当時の小学生たちは、机の下に指示通り避難したが、机ごと揺れている感じで、ただちに津波のことを心配したという。81名いた生徒たちは避難訓練通り校庭に集まり、校長先生から「大平山へ」という指示を受けそれに従う。

校舎は2階建てで、避難場所としては危険と判断したためであろう。しかし、大平山への避難訓練は行なったことがなかったという。

以下様々なターニングポイントで日常生活での活動や地域の連携がどのように作用したのかを中心に記述する。

○ 避難先を大平山へと 校長先生が判断

請戸城後（山城？）でもある大平山は高台にあり、小学校よりも避難に適した場所である。海から1.3キロの場所にあるが、それ以外周辺に高台はない。校内放送で、児童の安全確保、校庭に集合、大平山への避難が指示される。また、近所の人「津波が来るから逃げろ」る生徒が多い。学年ごとにまとめ、列を作る。学年の間に先生が入る。と駆け込んでくる（地域の連携）

靴をなくした子どもがいて、後ろの子が代わりの靴を渡した。ほぼ全員がこの子がどこで靴をなくしたことさえ記憶していた。

○ 6学年全体が避難

車いすの子が1人いたが、普段から行動を共にしていた。

○ 保護者への引き渡し

途中の街道は津波から逃げようとする人で一杯で、車も渋滞していたが、先生たちが車を止めて何とか横断できた。ここで、児童の保護者の一部が子どもたちを迎えに来たが、先生はそれを断り、避難行動を続ける。

○ 太平山への入り口

これまで避難訓練は太平山までは行ったことがなかったので山への入り口が分からない。そこで4年生の児童が「野球の練習で来たことがある」入り口を指示（日常生活の一部）、無事に山に入ることができる。山頂へ。

○ 津波の来襲

地震発生1時間10分後津波が来襲。大平山の麓まで津波が押し寄せる。先生は町の様子が心配で山道に戻るが、子どもたちには津波の様子を見せなかった。海の方から不気味な「ゴゴゴォ」という音が聞こえる。ここからは車いすの子は先生に背負われる。先生たちは請戸の様子を子どもたちに見せないように決心していた。

○ 避難所への移動

大平山から反対方向の6号線に降りる。子どもたちは体力の限界に達していたが、雪が降り始め、ここに留まることもできなかった。町役場にある体育館（サンシャイン浪江）を避難所として目指す。ちょうどようどいわき市の運送業者のトラックが通りがかり、生徒たち全員を町役場のある体育館に移動した（地域の力）

○ 町の体育館で

生徒の安否確認後親元に引き渡される。

その後福島原発事故により、避難指示があり、生徒たちはばらばらに。

図2にあるように生徒たちが翌日の卒業式に練習をしていた体育館は津波で浸水しており、体育館に避難していれば命はなかったと思われる。

4. 考察

児童たちの避難行動の経緯と選択肢を改めてまとめると

○ 避難先の決定

- ・大平山か
- ・校内

↓

○ 避難行動（整列）

- ・整列
- ・てんでんこ（ばらばら）

↓

○ 生徒の保護者への引き渡し

- ・学校で責任を持って全員避難



図2 請戸小学校の体育館の様子

・親に引き渡す

↓

○ 避難場所への入り方

- ・日常生活の中で知り得た事実
- ・試行錯誤的に探す

↓

○ 避難所への移動

- ・歩いて行く
- ・だれかに助けをもらう

避難行動に関しては日頃から列をなして行動することが多く、学年順に行動した。車いすの子を気遣ったり、靴の脱げた子をフォローするなどいつも通りである。

保護者の引き渡しに関しては、今回の東日本大震災では議論の分かれるところである。しかし、今回はきちんと引き渡さないことを示していることが評価できる。

先生がたが付き添っていたが、生徒たちが自主的に判断して日常の行動を避難に活かしたことが分かる。それは、大平山の入り口への入り方の発見などにも示されている。生徒たちが日頃元気に遊んでいたからこそ道が開け、また先生方も生徒たちの判断に従う勇気を持ったことが避難を成功させたと考えられる。

最後に避難所への移動であるが、このときはそこまで3キロ以上歩き雪も降っていて子どもたちの体力は限界にあった。そのときに偶然とは言え大人数移動可能なトラックが通りがかったのは、日頃から学校と地域が連携していることの現れであると考えられる。

参考文献

- 1) 岩本由輝編 2013年 歴史としての東日本大震災 刀水書房
- 2) 請戸小学校物語 大平山をこえて
URL : <http://ukedo.com/>